TADOKU JUNIOR やさしい名作リーダー ★★★☆☆ ふつう 653語

The Ugly Duckling

みにくいアヒルの子

E. Louise Smythe（1904年の本） 原文そのまま 朗読：Sarah Jennings、Abby

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 大きなたまごから生まれたアヒルの子は、みんなと見た目がちがうので、つつかれたり、からかわれたり。ひとりぼっちで冬をこえた春、みずうみで見たものは……。

A duck made her nest under some leaves.



She sat on the eggs to keep them warm.

At last the eggs broke, one after the other. Little ducks came out.

Only one egg was left. It was a very large one.

At last it broke, and out came a big, ugly duckling.

"What a big duckling!" said the old duck. "He does not look like us. Can he be a turkey?--We will see. If he does not like the water, he is not a duck."

The next day the mother duck took her ducklings to the pond.



Splash! Splash! The mother duck was in the water. Then she called the ducklings to come in. They all jumped in and began to swim. The big, ugly duckling swam, too.

The mother duck said, "He is not a turkey. He is my own little duck. He will not be so ugly when he is bigger."

Then she said to the ducklings, "Come with me. I want you to see the other ducks. Stay by me and look out for the cat."

They all went into the duck yard. What a noise the ducks made!

While the mother duck was eating a big bug, an old duck bit the ugly duckling.

"Let him alone," said the mother duck. "He did not hurt you."



"I know that," said the duck, "but he is so ugly, I bit him."

The next duck they met, said, "You have lovely ducklings. They are all pretty but one. He is very ugly."



The mother duck said, "I know he is not pretty. But he is very good."

Then she said to the ducklings, "Now, my dears, have a good time."

But the poor, big, ugly duckling did not have a good time.

The hens all bit him. The big ducks walked on him.

The poor duckling was very sad. He did not want to be so ugly. But he could not help it.

He ran to hide under some bushes. The little birds in the bushes were afraid and flew away.

"It is all because I am so ugly," said the duckling. So he ran away.

At night he came to an old house. The house looked as if it would fall down. It was so old. But the wind blew so hard that the duckling went into the house.



An old woman lived there with her cat and her hen.

The old woman said, "I will keep the duck. I will have some eggs."

The next day, the cat saw the duckling and began to growl.

The hen said, "Can you lay eggs?" The duckling said, "No."

"Then keep still," said the hen. The cat said, "Can you growl?"



"No," said the duckling.

"Then keep still," said the cat.

And the duckling hid in a corner. The next day he went for a walk. He saw a big pond. He said, "I will have a good swim."

But all of the animals made fun of him. He was so ugly.

The summer went by.

Then the leaves fell and it was very cold. The poor duckling had a hard time.

It is too sad to tell what he did all winter.

At last it was spring.

The birds sang. The ugly duckling was big now.

One day he flew far away.



Soon he saw three white swans on the lake.

He said, "I am going to see those birds. I am afraid they will kill me, for I am so ugly."

He put his head down to the water. What did he see? He saw himself in the water. But he was not an ugly duck. He was a white swan.

The other swans came to see him.

The children said, "Oh, see the lovely swans. The one that came last is the best."

And they gave him bread and cake.

It was a happy time for the ugly duckling.

アヒルのお母さんが、木の葉の下にすをつくりました。

お母さんはたまごの上にすわって、たまごをあたためました。

とうとう、たまごが一つ、またひとつとわれました。小さなアヒルの子たちが出てきました。

たまごが一つだけのこりました。それは、とても大きなたまごでした。

とうとうそのたまごもわれて、大きくてみにくいアヒルの子が出てきました。

「なんて大きな子でしょう！」と年よりのアヒルが言いました。「わたしたちにちっともにていないわ。シチメンチョウの子かしら？――　まあ、ようすを見ましょう。水がきらいなら、アヒルではありませんからね。」

次の日、お母さんアヒルは子どもたちを池へつれていきました。

ザブン！ザブン！お母さんアヒルは水に入りました。それから、子どもたちに「入っておいで」とよびました。子どもたちはみんなとびこんで、泳ぎはじめました。大きくてみにくいアヒルの子も泳ぎました。

お母さんアヒルは言いました。「この子はシチメンチョウじゃないわ。わたしのかわいいアヒルの子よ。大きくなったら、そんなにみにくくなくなるわ。」

それからお母さんは子どもたちに言いました。「いっしょにいらっしゃい。ほかのアヒルたちに会わせたいの。わたしのそばにいて、ネコに気をつけるのよ。」

みんなでアヒルの庭に入っていきました。アヒルたちは、なんてにぎやかだったことでしょう！

お母さんアヒルが大きな虫を食べているあいだに、年よりのアヒルがみにくいアヒルの子をつつきました。

「その子にかまわないで。」とお母さんアヒルは言いました。「その子はあなたに何もしていないでしょう。」

「それはわかってるさ。」とそのアヒルは言いました。「でも、あんまりみにくいから、つついたんだよ。」

次に会ったアヒルは言いました。「かわいい子どもたちですね。一羽をのぞいて、みんなかわいいわ。あの子はとてもみにくいわね。」

お母さんアヒルは言いました。「あの子がかわいくないのはわかっています。でも、とてもいい子なんですよ。」

それからお母さんは子どもたちに言いました。「さあ、みんな、楽しんでいらっしゃい。」

でも、かわいそうな大きくてみにくいアヒルの子は、ちっとも楽しくありませんでした。

ニワトリたちはみんなその子をつつきました。大きなアヒルたちはその子をふみつけました。

かわいそうなアヒルの子は、とても悲しくなりました。こんなにみにくくなんて、なりたくありませんでした。でも、どうしようもなかったのです。

アヒルの子は走っていって、しげみの下にかくれました。しげみにいた小鳥たちはこわがって、飛んでいってしまいました。

「みんな、ぼくがこんなにみにくいからだ。」とアヒルの子は言いました。そこで、アヒルの子はにげだしました。

夜になって、アヒルの子は古い家にたどりつきました。その家は、今にもたおれそうに見えました。それほど古かったのです。でも、風がとても強くふいていたので、アヒルの子はその家に入りました。

そこには、おばあさんが、ネコとニワトリといっしょに住んでいました。

おばあさんは言いました。「このアヒルをかっておこう。たまごがもらえるからね。」

次の日、ネコはアヒルの子を見て、うなりはじめました。

ニワトリは言いました。「あんた、たまごをうめる？」アヒルの子は「ううん。」と言いました。

「それなら、だまってなさい。」とニワトリは言いました。ネコは言いました。「おまえ、うなれるかい？」

「ううん。」とアヒルの子は言いました。

「それなら、だまってな。」とネコは言いました。

それで、アヒルの子はすみっこにかくれました。次の日、アヒルの子はさんぽに出かけました。大きな池が見えました。アヒルの子は言いました。「思いきり泳ごう。」

でも、動物たちはみんな、アヒルの子をからかいました。それほどみにくかったのです。

夏がすぎていきました。

やがて木の葉がちって、とても寒くなりました。かわいそうなアヒルの子は、つらい日々をすごしました。

冬のあいだどんなふうにすごしたかは、悲しすぎてお話しできません。

とうとう春になりました。

鳥たちが歌いました。みにくいアヒルの子は、もう大きくなっていました。

ある日、アヒルの子は遠くまで飛んでいきました。

まもなく、みずうみに三羽の白い白鳥がいるのが見えました。

アヒルの子は言いました。「あの鳥たちに会いに行こう。ころされてしまうかもしれない。ぼくはこんなにみにくいんだもの。」

アヒルの子は、頭を水のほうへ下げました。何が見えたでしょう？水にうつった自分のすがたが見えました。でも、それはみにくいアヒルではありませんでした。白い白鳥だったのです。

ほかの白鳥たちが、そばにやってきました。

子どもたちが言いました。「わあ、見て、きれいな白鳥！さいごに来たのがいちばんきれいだね。」

そして子どもたちは、パンやケーキをくれました。

みにくいアヒルの子にとって、それは幸せなときでした。

たんご と クイズ　みにくいアヒルの子

nest す	**eggs** たまご	**duckling** アヒルの子
turkey シチメンチョウ	**pond** 池	**cat** ネコ
hens ニワトリ（めんどり）	**swans** 白鳥	

Q1 お母さんアヒルは、大きな子がシチメンチョウではないとどうしてわかりましたか？

① 水に入って泳いだから　② ガアガア鳴いたから　③ たまごをうんだから

Q2 おばあさんの家のニワトリは、アヒルの子に何ができるかききましたか？

① うなること　② たまごをうむこと　③ 空を飛ぶこと

Q3 春になって、アヒルの子が水にうつった自分を見ると？

① もっとみにくくなっていた　② 小さなアヒルだった　③ 白い白鳥だった

こたえ

Q1 ①　お母さんは「水がきらいならアヒルではない」と言いました。大きな子も池で泳いだので、アヒルの子だと思ったのです。

Q2 ②　ニワトリは「たまごをうめる？」とききました。「うなれるかい？」ときいたのはネコですね。

Q3 ③　みにくいアヒルの子は、じつは白鳥の子でした。大きくなって、美しい白い白鳥になっていたのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7841（E. Louise Smythe、1904年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1904 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Sarah Jennings、Abby（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。